

キシノ觀アリ

同氏ノ我邦植物分類學ニ及ボセル功績ノ大ナルコト大抵此ノ如シ叙上ノ理由ニヨリ小官等右エンゲレル教授ニ對シ勳二等旭日重光章叙賜ノ御沙汰相成度存候ニ付其筋ヘ御上申被下度此段及具陳候也

大正二年七月

東京帝國大學理科大學教授理學博士

松村任三

東京高等師範學校教授理學博士

齋田功太郎

東京帝國大學農科大學教授理學博士

白井光太郎

文部大臣法學博士奧田義人殿

(右白井礫水執筆草稿)

〇一反歩千圓儲カッタ藥草ノ話

藥學博士

刈米達夫

稻ヲ植エテ一反歩ノ收入ガヤツト七、八十圓、麥ナラバ三、四十圓ガ關ノ山、トコロガ此處ニ一反歩千圓ノ收穫トハ嘘ノ様ダガホントウニアツタ話、但シ十年以上モ前ノ話ダカラアフテルニハ及バナイ、頃ハ大正四、五年ノ頃、歐洲ノ天地ハ砲煙ト毒瓦斯ニ蔽ハレ、數十年ノ平和ニ慣レタ人間ガ飛行機ト爆彈デ矢ツギ早ニ攻メタテラレタノデ猛裂ナ恐怖、不安症ニ襲ハレ本モノノ彈丸キズヨリハ精神病患者ノ方ガ多カラウトイフ始末、ソコデ俄ニ必要ニ迫ラレタノハ鎮靜藥、其鎮靜藥ノ原料トシテ急ニ需要ガ増シタノガ我がかのこさうノ根、即チ纈草根デアル、百斤三十圓位ダツタ纈草根ガ五十圓ダ百圓ダ二百圓ダ三百圓ダ、トウドウ三百五十圓位マデ競リ上ツタ、纈草根ハ一反歩カラ三百斤乃至四百斤採レルカラ最低ノ三百斤トシタトコロデ優ニ千圓、マカリ違ヘ



か の こ さ う 纈 草
(*Valeriana officinalis* L. var. *latifolia* Miq.)

下ガッタノデ復タビ土藏ハ人手ニ渡リ祖先傳來ノ土地マデモ賣リ拂ッタトイフ位ノ處ガ落チデアッタ

コノ纈草ハ學名ヲ *Valeriana officinalis* Linn. var. *latifolia* Miq. トイフ、歐洲ニハ *V. officinalis* Linn. ヲ産スル、根ノ氣發油(纈草油)含量ハ歐産ガ一%内外ナルニ反シ邦産品ハ四—六%デアル、而シテ纈草根ノ藥効及ビ用途ハ主トシテ纈草油ニアルガ故ニ邦産ノ纈草根ハ世界第一ノ品質ヲ有スル、獨逸藥局方ニ於テモ纈草根ハ歐産ヲ用キ、纈草油ハ特ニ日本産ヲ收載シテ居ル

本邦ニ於ル纈草根ノ年産額ハ十二萬斤内外、其内約半額ノ六萬斤、價格ニシテ約二萬圓ハ獨逸ニ輸出サレル、主要栽培地ハ神奈川、群馬、長野ノ諸縣デアアルガ、品質ハ神奈川産ガ第一デ市價モ最モ高イ、余ハ本邦各地産

バ千三四百圓ニモナル、此處ニ於テ古クカラ纈草ノ栽培地トシテ知ラレテ居ル神奈川、長野ノ諸縣下デハ纈草成金トイフ者ガ出現シ急ニ土藏ヲ建テルヤラ、田畑ヲ買ヒ込ムヤラトイフ騒ギ、麥モ豆モ引ツコ抜イテ纈草ヲ植エ付ケタ、處ガ其内ニ戰爭モスンデ大正六年頃ニガタツト百斤六十圓位ニ



纈草ノ栽培

(和州足柄上郡中井村植木萬作氏ノ畑 昭和二年五月撮影)

ノ纈草根ノ含油率並ニ纈草油ノ性質ヲ比較試驗シテ見タ
ガ其結果ハ左ノ通りデアル

〔產地〕	〔收油率(%)〕	〔比重〕	〔酸數〕	〔エステル數〕	〔旋光度〕
東京	三・三	〇・九六八	二・五	一三七・六	左三四・五
北海道	二・三	〇・九七四	三・一	一五〇・一	〃三二・八
神奈川	三・六	〇・九八七	二・八	一四六・三	〃三一・三
栃木	二・五	〇・九八八	一・七	一四九・四	〃三〇・七
長野	四・三	〇・九七四	一・一	一四三・一	〃三三・二

纈草ノ栽培ニ就テハ内務省衛生試驗所藥用植物圃場ニ於
テモ若林榮四郎君ガ數年來研究ヲ繼續シテ居ラレルガ同
氏ニヨレバ纈草ニ對シテ窒素肥料ハ收穫量ハ勿論、含油
率ニモ著シイ影響ヲ及ボスコトガワカッタ、即チ三要素
試驗ニ於テ窒素ヲ缺キタル場合ニハ其收量、含油率共ニ
全然無肥料ノ場合ニ等シイ、上掲ノ寫真ハ昭和二年五月
神奈川縣足柄上郡中井村植木萬作氏ノ纈草畑ヲ撮影シタ
モノデアアル、纈草ハ五月上旬花莖ヲ抽キタル頃地上三寸
位ノ處カラ切り取ッテ根ノ肥大ヲハカルノガ普通デアアル
ガ美シキ花ヲ見セントノ植木氏ノ厚意ニヨリ態々花穂ノ
切り取りヲ遅ラセタモノデアッテ紅白ノ花ガかのこ絞リ
ニ地ヲ蔽フ様ハ誠ニ美シイモノデアッタ

たまはじきたけノ孢子囊放擲

【牧野富太郎云フ】かのこさうヲ纈草ト書クノハ此レハ漢名デハナイ、纈ハしぼり染ノ事故かのこさうヲサウ書イタマデデアル其レ故纈草トアレバ之レヲかのこさうト訓ムベキデ決シテ其レヲ音デけつさうト讀ンデハナラヌノダガ今日ハ從來カラノ習慣デ醫、藥界デハ之レヲ音讀シテモ通ズル様ニナツテ居ル然シ之レヲ音讀スルノハ丁度つゆくさノ露草ヲるさうト云ヒさくらさうノ櫻草ヲあうさうト云ヒすはまさうノ洲濱草ヲしうひんさうト云フ様ナモノデアアル、通ズレバドチラデモヨイ様ナモノ、其レヲ匡セバ其音讀ノモノヲ其植物ノ名ト思ツテハナラヌ即チかのこさうハ何處迄モかのこさうデ決シテけつさうデハナク又けつさうトサウ呼ブ植物ハ此世ノ中ニハアリハシナイ、此纈草ノ字面ハ松岡玄達ノ著『本草一家言』刊ト云フ書物ノ排草ノ文中ニ「若水云和所稱纈艸即此物也」トアルノガ始メテデハナイカト思フ其レヲ宇田川榕菴ガ『和蘭藥鏡』ヘ書キ其レカラ醫、藥界ヘ其字面ガ擴ガツタモノ、様デアアル、纈草ヲ人ニヨツテハけつさうト云ヒ人ニヨツテハきつさうト呼ベドモ是レハけつさうト云フノガ本當デ纈ニきつト云フ音ハナク即チ胡結ノ反シノけつデアアル

○たまはじきたけノ孢子囊放擲

理學士 大槻虎男

眞菌類ノ孢子散布ノ適應ニハ驚嘆ノ念ヲ禁ゼザラシムルモノガ多い、ピロボルス屬(藻菌綱)アスコボルス屬(子囊菌綱)ナドハ有名デ普通ニ植物學書ニ記シテアル、ピロボルスデハ孢子囊柄ガ長ク出テソノ頂端ニ内生孢子ヲ造ル、孢子成熟ニ際シ孢子囊柄ノ上端ニ膨壓ノ變化ヲ來シ孢子囊ヲ絞リ出ス、孢子囊ハ袋ノ頂端ヲ破リ激シイ勢ヲ以テ放擲サレ、粘性アル寒天質ニ包マル、故近處ノ草ノ葉ナドニ粘着シ、牛馬等草食動物ノ腹中ニ入り糞ト共ニ外ニ出テソコニ繁殖スル、アスコボルスハ八裂子(gascol pores)ヲ容レル子囊ガ孢子成熟ニ際シ急ニ伸ビテ生殖體ノ外側ニ高ク出デソレト同時ニ粘液ニ包マレタ八裂子ガ順々ニ飛ビ出ス、ソシテ矢張り草ノ葉ナド